

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

クスコ県カルカ郡のアシエンダと先住民共同体

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 秀雄 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00001663 |

クスコ県カルカ郡のアシエンダと先住民共同体

木村 秀雄

東京大学大学院総合文化研究科

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1. 序論 | 3. アシエンダ・ウルコ |
| 1-1. はじめに | 3-1. 歴史的経緯 |
| 1-2. ペルー共和国カルカ郡 | 3-2. アシエンダ所有者の交代 |
| 2. アンデス南部高地の農村社会経済体制 | 3-3. 農地改革とアシエンダ経営 |
| 2-1. カルカ郡の農村社会経済体制 | 3-4. アシエンダ経営と労働力利用 |
| 2-2. アシエンダと先住民共同体の相互関係 | 4. 結論 |

1. 序論

1-1. はじめに

本論は、ペルー共和国・クスコ県 (Departamento de Cuzco)・カルカ郡 (Provincia Calca) における、先住民社会と非先住民社会の接点と分節に関する、予備的かつ部分的な論考である。筆者は同郡における先住民社会の現況およびアシエンダをはじめとする周囲の非先住民社会との歴史的関係についての総合的な研究をまとめつつあり、本論はその一部となるものである。

ペルー・ボリビア・エクアドルを包含する中央アンデス地帯における、先住民共同体と非先住民社会の関係は、一様ではない。歴史的にみても、先住民社会のあり方はどこでも同じであったわけではなかったし、現在でも、先住民社会と周囲の地域社会や国家との関係は、地域によってさまざまである。また、先住民たちの自己意識や自己規定も多様であり、先住民運動をとってみても、その展開の仕方は様々である。

この多様性はカルカ郡だけを対象にしてもすぐに見て取れるものではあるが、多様なものをただ紹介したのでは、それ以上に議論が深まらない。重要なのはその多様性がどのような原因によって生み出されたのか、またそれが現在まで維持されているのはなぜか、そしてまたその多様性は将来にわたって保証されるものであるのか、考察することである。その際には、多様性の存在に関わる地域的な状況、歴史的な状況など、ひとつの地域を総体的にみる視点が重要である。

先住民社会を理解するためには、ただ彼らの社会を微視的に詳細に理解するだけでは不十分であり、周囲の社会との関係を把握する作業が欠かせない。また、周囲の非先住民社会、例えばアシエンダなどの大土地荘園の理解のためには、先住民社会との関係への考慮を欠かすことはできないのである。そのような地域社会の、具体的にはカルカ郡の総体的理解が筆者のめざす目標である。

その目標に向う経過報告として、本稿ではカルカ郡の現況をまとめておくとともに、筆者によるアンデス南部高地の農村社会経済体制の概要を提示する。またそれと同時に、カルカ郡における事例として、ウルコというひとつのアシエンダをとりあげ、その実相を提示しておく。この例は、筆者が考察の対象としているアシエンダや先住民共同体のひとつであり、将来における筆者の研究の姿を示すために、できるだけ詳細にその姿を明らかにしたいと考えている。

1-2. ペルー共和国カルカ郡

調査地であるカルカ郡について概略を述べておこう。同郡は、アマゾン川の本流となるウカヤリ川 (Río Ucayali) の上流にあたるビルカノタ川 (Río Vilcanota) の右岸 (北岸) に広がる (図1)。領域は、標高2,900mのビルカノタ河岸平坦部から、標高5,000mを超える高地部までを包含する。河岸部に中心地カルカをはじめとして、ピサク (Pisac)、コヤ (Coya)、ラマイ (Lamay) などの町が展開する他、河岸から北に向けて広がる斜面部にいくつもの村落を抱える広い郡である。

観光都市クスコからカルカの町まで、舗装道路を走ってわずかに50km。国内外の観光客が、ビルカノタ川流域に散在するピサク、オリヤンタイタンボ (Ollantaytambo) などの数多くの先史遺跡に日常的に訪れる。また、カルカの町から北の山地に向かう道路は、最後部の峠を越えてラ・コンベンシオン郡 (Provincia La Convención) の低地部へと繋がっている。この道は定期バスやトラックが頻繁に往来し、亜熱帯低地と高地をつなぐ幹線の一つとして機能してきた。

このように、カルカ郡は地域や国家の政治経済体制に組み込まれている。しかしながら、ビルカノタ川底部から山地に向かい、幹線道路からは離れた領域に一度踏み込めば、そこには未だに先住民的色彩が色濃く残っている、そこに点在する先住民共同体ではスペイン語を満足に話すことができない人々が数多く居住し、独特の儀礼を営み、共同体独特の社会体制を保っている。この郡には、孤立と開放という、一見相反するかに見える現象が併存する。

これまで、ビルカノタ河谷については、さまざまな研究が発表されてきた。ゲイド (D.W. Gade) による地理学的な研究 (Gade 1975)、オーラブ (B.S. Orlove) の地域研究を標榜した経済学的な研究 (Orlove 1977)、フィオラバンティ=モリニエ (A. Fioravanti-Molonié) の歴史研究と現状分析を組み合わせたユカイ (Yucay) 地方に関する研究 (Fioravanti-Molonié 1982)、グラベ (L.M. Glave) とレミー (M. I. Remy) によるオリヤンタイタンボ地方の歴史研究 (Glave and Remy 1983) などが代表的なものである。

しかし、どの論考をとってみても筆者がめざす農村地域社会の総合的理解には十分ではない。特にカルカ郡については情報がとぼしく、筆者が補うべき部分はまだまだ大きいと言わざるを得ない。

2. アンデス南部高地の農村社会経済体制

2-1. カルカ郡の農村社会経済体制

カルカ郡およびクスコ県高地部の農村社会経済体制について、その概略を簡単に述べておこう。1968年に始まった農地改革に先立つ長い期間、カルカ郡には大きな私有農園である「アシエンダ (hacienda)」や中規模の私有農園が多くあった。「アシエンダ」とは、コロノ (colono) またはフェウダタリオ (feudatario) と呼ばれる、非近代的な身分関係に縛られた常住労働者（農奴と呼ぶ場合もある）を抱える荘園をいい¹⁾、このような労働者のいない中規模の「私有農園」と区別する。そしてまた、ほとんど自給用の作物した栽培することができない小さな私有地をもつ小規模な自作農や、私有地を持たず土地を借りることによって生計をたてていた小作農、農地の使用権を全くもたない農業労働者が存在した可能性も大きい²⁾。

しかし、前に述べたように、カルカ郡は大都市であるクスコに近く、ビルカノタ河谷底部一体は、市場経済におおむね組み込まれていたにもかかわらず、すべての領域が私有農園によって覆われていたわけではない。高地部を中心に複数の先住民共同体³⁾ (comunidad campesina、農地改革以前には comunidad indígena と呼ばれた) も存在したのである。「先住民共同体」とは、1920年以降に法的に認知された先住民の領域単位であり、「アシエンダ」や「私有農園」と異なり、土地は共同体成員の「共有地」であって、どの土地区画にも私有者が存在せず、それを自由に売買することができないものをいう。

アシエンダや中規模私有農園は、その地理的な位置によってその性格を若干異にするとはいえ、基本的には、商品作物を市場で販売し貨幣収入を得ることを目的とする企業体である。一方、先住民共同体は、外部社会からの自立性を保証され、市場・資本主義への参入より、食料自給を基本的な目標とする社会単位である。

2-2. アシエンダと先住民共同体の相互関係

中央アンデス農村地帯は、市場志向を持つアシエンダと、自給をめざす閉鎖的な先住民共同体に大きく二分され、それぞれが持つ異なった性格のために、全く別種の社会政治単位として扱われる傾向があった。そして、両者の関係について語る際には、アシエンダによる先住民共同体への侵入や、先住民共同体による抵抗だけが問題とされる場合が大部分であった。このような研究に対して、前出のアメリカ合衆国の人類学者ベンジャミン・オーラブなどによって、この2つの単位のみ注目することの不当性も指摘されたこともあるが (Orlove and Custred 1980)、両者の中間に存在する小規模自作農、小作農、農業労働者の実態と役割についての研究が大きく進展したわけではない。

筆者も、カルカ郡における調査およびボリビアの農地改革資料の解析を通して (木村 1993)、小作農などの重要性を認識するに至ったが、それを十分に分析するだけの資料を

持ち合わせているわけではない。

しかし、かつてのアシエンダ／共同体という二項対立モデルと異なり、両者の関係、特に労働力の利用を通じての関係が、非常に密接であり、カルカ郡ひいてはクスコ県全体の農村社会のあり方を規定してきたことは明らかになった。その経済運営の目標が基本的に別の方向を向いている以上、アシエンダおよび先住民共同体それぞれが持つ生産様式は、基本的に別種のものである。しかし、これは両者の間に関係がなかったということの意味しない。アシエンダと先住民共同体の相互関係に、労働力利用を通して新たな光を当てることができる。

多くのアシエンダ研究が教えるように（例えばBurga 1976）、アシエンダの労働力には二種類あった。その一つは、コロノなどの常勤労働力であり、もう一つが、アシエンダ外から導入される季節労働力である。そして、さまざまな資料や証言から判断する限り、季節労働は共同体の先住民が担っていたと考えざるをえない。また、先住民共同体は食料の自給をめざしていたといっても、貨幣が全く流通していなかったわけではない。貨幣収入を確保するために、少量の余剰生産物などを売却することもあったし、上記のように周囲のアシエンダなどに労働力を提供することもあったのである。アシエンダも先住民共同体も、地域全体のシステムから切り離されたものでなく、あくまでシステムの一部であり、労働力に関して言えば、一定の相互補完的な役割を担っていたと考えるべきである。

アシエンダの先住民共同体の配置は、地方によって大きな違いを見せる。また、筆者が分析の対象とするクスコ県のビルカノタ河谷一帯の狭い地域においても、その配置は多様である。例えば、ピサクの町からカルカの町までの間にはビルカノタ川から上部の高原地帯までを包含する大きなアシエンダが、少なくとも農地改革直前の時期には存在しなかった⁴⁾。カルカの町を過ぎると上記のような巨大なアシエンダが出現し始め、これはオリヤンタイタンボの町の近くまで続く。前記の地帯では大規模なアシエンダが底部に存在せず、標高3,500mを超えたところに先住民共同体が带状に並ぶ。しかし、そのような斜面上部においても、牧畜の適地たる湿原の広がる地帯には、牧畜経営を中心とする巨大なアシエンダが成立していた。このような状況は、河谷沿いから上部までを一つのアシエンダが包含するウルバンバ郡とは大きく異なる。

さまざまな社会単位が複雑に錯綜するカルカ郡について、いくつかのアシエンダと先住民共同体の大まかな動きを20世紀初頭から現在まで追ってみることが筆者の当面の目標である。すぐ上で述べた先住民共同体とアシエンダの配置は、固定的であったわけではなく、時間の流れとともに常に変化してきたからである。カルカ郡のビルカノタ河谷底部におけるアシエンダの状況も、時間的に変化してきたことは間違いないし、最上部の牧畜アシエンダも、ずっと同じ姿であったわけではない。

農地改革によってアシエンダは解体・接収された結果、農業共同組合や新たな先住民

共同体として再編され、現在では存在しない⁵⁾。しかし、これを過去のものとして無視してしまうのでは、アシエンダと深い関係があった先住民共同体がどうして現在の姿をとったのか、理解することができない。人類学者としての筆者の興味の中心は先住民共同体にあり、彼らの現在の姿が研究テーマであるとはいえ、先住民共同体がカルカ郡の経済社会体制全体と密接に関わっている以上、アシエンダを過去のものとして忘れ去るのでなく、その実情に対する理解を深める作業は不可欠である。

本稿において、上記の作業のすべてを詳細に述べる余裕はない。その一部を示すものとして、ビルカノタ河谷底部アシエンダであったアシエンダ・ウルコの例を取り上げることにしたい。

3. アシエンダ・ウルコ

3.1. 歴史的経緯

農地改革の際に提出された公証人証書 (Ministerio de Agricultura Zona Agraria XI Cuzco Expediente 4-14-1, pp.13-16) によれば、アシエンダ・ウルコは、ボニファシオ・アルバレス・メルカド (Banifacio Alvarez Mercado) という人物の所有地であったが、このアシエンダへの借金を受け継いだイギリス人ヘンリー・アラン・ジョブ (Henry Allen Job) という人物が、このアシエンダの競売を上記の所有者 (死後はその相続人) に対して申し立てた。競売の結果、プロテスタント伝道組織 The Inca Schools Society のアーサー・ステュアート・マクネルン (Arthur Stuart MacNaim) がこのアシエンダを32,696ソーレスで落札した。

1910年の購入時点では、アシエンダ・ウルコの総面積は4,951.67haで、ビルカノタ川の右岸から北へ広がり、ピトゥシライ (Pitusilay) の雪山を越え、高原部の草原地帯 (プナ puna) までを包括する大きなアシエンダであった。1962年に至り、アシエンダの領域の大部分は The Inca Schools Society の手を離れる。アシエンダ直轄農地のために引かれた灌漑水路より上部のカンカン (Ccanccan) と呼ばれた1,605.5haの土地は、他の地主に売却されてアシエンダ・フキ (Hacienda Juqqi) と呼ばれるようになり、もっと上部のワマンチヨケ (Huamanchoque) と呼ばれる3,156.555haにのぼる区域は、コロノたちに売却されたのである。この時点で、アシエンダ・ウルコの領域は、ビルカノタ川沿いの189.2569haの土地に限定されるようになった。

そしてまたさらに同年、ウルコのビルカノタ川沿いの領域のうち最も東側のヤナワヤ (Yanahuaya) と呼ばれる6区画からなる領域が、コロノたちに売却された。この土地は、その後、協同組合サンホセ (Cooperativa San José) と呼ばれるようになった。また、アシエンダ中央部の7区画が、同アシエンダの管理を請け負っていたフリオ・サンロマン・ムヒカ (Julio San Román Mújica) に譲渡され、キンタ・レベッカ (Quinta Rebeca) と呼ばれ

るようになる。アシエンダ・ウルコに残された最終的な面積は、1969年9月27日に提出された申告 (Declaración Jurada) によれば103.90ha、そのうち3.90haはカルカからウルバンバへと通じる街道に当たるため、アシエンダの実質面積はちょうど100haとなる。

そして、1968年のベラスコ左翼軍事政権の成立とともに開始された農地改革はクスコ地方にも及び、アシエンダ・ウルコは、1974年4月26日の農林省の局長公告 (Resolución Directoral) によって全面接収されることになった。また、1975年3月5日には飼育していた牛も接収された。この直前の時期にウルコにおいてはコロノたちに賃金も支払われていたし、上記のごとくに直接利用地以外の高地部の土地を売却したり、コロノたちに土地を売却したりする手段がとられた上、コロノとアシエンダの関係は良好であったにもかかわらず、全面接収を受けたのには、所有者が外国のプロテスタント伝道団体であったことや、所有者が接収に強く抵抗しなかったこと⁶⁾などが、その原因であると考えられる。

そして、接収後もウルコは畜産協同組合として機能し続け、産出する牛乳や乳製品は、カルカ地方において名高いものであった。この組合は、農地改革後に有効に機能した数少ない協同組合であったのである。しかしながら、クスコ県において近年急速に進行した協同組合解散の波の中で、ウルコの牧畜協同組合も解散され、牛乳生産も停止した。そしてまた、ウルコの共同農地も協同組合メンバーの間で分配され、協同組合は完全に機能を停止したのである。

一方、サンロマン家に割譲された土地は面積も少なく、コロノなどの常勤労働者を抱えていなかったため、ウルコとは独立した形で農地改革を迎え、私有農園としてそのまま保全され、今日に至っている。また、協同組合サンホセは、最近に至って、その土地の一部を隣接する地主によって占拠され、そのまま回復できない状況にある⁷⁾。

3-2. アシエンダ所有者の交代

The Inca Schools Societyによるアシエンダ落札について、まず考察する。最初に、競売を申し立てたのが、イギリス人ヘンリー・アラン・ジョブであることが注目される。公証人証書の中では、彼はホセ・オチョ (José Ochoa)、リカルド・エチェガライ (Ricardo Echegaray)、アレハンドロ・ベラスコ・デル・カスティリヨ (Alejandro Velasco del Castillo) という3人の人物から債券を獲得したと書かれているだけである。このヘンリー・アラン・ジョブという人物について、現時点ではこれ以上のことはわからない。

19世紀後半から20世紀初頭の時代は、海外からの投資や移民が新大陸に殺到した時代である。また、新大陸へのヨーロッパからの移民も多く、新大陸の多くの地方で国民の民族構成を大きく変化させた。このような大量の移民の到来は、アメリカ合衆国やアルゼンチンなどで顕著であったが、それと比較して、ペルーの高地部には大量のヨーロッパ移民が流入した形跡はない。しかし、ヨーロッパからの移民がクスコの上流社会と結

びつくことによって、クスコ地方の社会構成を一部変化させた。

その典型的な例が、フランスからの移民であるロマンビル (Romanville) 家の場合である。ロマンビル家は、農地改革直前の時点で30箇所にのぼるアシエンダを所有し、そのうち最大のワドキニャ (Huadquiña) は総面積152,480haにのぼる巨大なアシエンダであった。本報告書に関係する部分だけでも、カルカ郡の上部山地に位置する、牧畜を中心としたアシエンダ・チャワイティレやアシエンダ・パチャマチャイもロマンビル家の所有地であった。

その他にも、ユカイ (Yucay) に大きなアシエンダを有するオリウエラ (Orihuela) 家と姻戚関係を結び、ユカイの町の東に、アシエンダ・ワヨカリ (Hacienda Huayocari) を所有したイタリア出身のランバリ家 (Lambari) の例もある。このような動きのひとつとして、The Inca Schools Society のウルコ購入を位置づけることができるだろう⁸⁾。

3.3. 農地改革とアシエンダ経営

ベラスコ軍事政権の農地改革によって全面接収を受けたアシエンダは、それほど数が多くない。ビルカノタ河谷一帯ではカルカとその下流にある町ワイリャバンバ (Huayllabamba) の間に位置するアシエンダ・ワラン (Hacienda Huarán) が全面接収されたアシエンダとして名高いが、ランバリ、オリウエラ、オリヤンタイタンボの町の東に位置するクラサオ (Curasao) 家のアシエンダ・ヤナワラ (Hacienda Yanahuara) も全面的に接収されずに、旧所有者に土地の一部が残された。ワランの場合には、所有者であったフェルナンデス (Fernández) 家の経営方針とコロノたちの衝突などが全面接収の原因であると言われるが、ウルコの場合には前に述べたように、所有者がプロテスタントの伝道団体であったことが、全面接収の大きな原因であると考えられる。

農地改革時のウルコの管理者アルフレド・ベル (Alfred Bell) は、ウルコに常駐してはおらず、常にアシエンダの統括者 (マヨルドモ mayordomo) を置いていた。前出のフリオ・サンロマンもその一人であったが、彼は The Inca Schools Society が学校を経営するカンチス郡シクアニ (Sicuani) の出身で、ウルコの管理人として赴任してきたものと思われる。農地改革直前の時期にも、他の統括者がウルコには存在し、アシエンダ経営の大きな部分をまかされていた。

アシエンダ経営に所有者が関与する度合いは、アシエンダ領主によってさまざまであったが、アシエンダ領主 (アセンダド hacendado) は、アシエンダ屋敷のほかにもクスコ市にも屋敷を構え、アシエンダにはマヨルドモを置いていた。サンロマンの権限は大きく、請負契約が終わった後にも、簡単に身分を手放そうとせずに、最終的にアシエンダ・ウルコの土地の一部を自らの私有地として獲得するに至ったのである (Anrup 1990)。最後のマヨルドモの弁によれば、サンロマンとの紛争の後、管理者であるベルは経営を請け負わせることをやめ、マヨルドモを置いて、以前より経営に直接にタッチするようにな

ったとのことである。

農地改革以前でも、また現在でも、土地の所有者が農場経営を自ら行わない例は少なくなかった。農地改革以前には、アシエンダ全体が分益小作や請負耕作にまわされた例が少なくなかったし、現在では中小規模の私有農園を請負に出す例もある。

3.4. アシエンダ経営と労働力利用

1973年の6月に農業省によって作成されたウルコの地図によれば、実質面積100haは、直接耕作地76.99ha、間接耕作地0.82ha（地図の中に、フェウダタリオと記された土地区画が1か所存在する）、放牧地21.32ha、家屋等0.87haである。地図の中には、アシエンダの耕作地として、トウモロコシと記している部分が多いが、オオムギやアルファルファと記した部分、ただアシエンダ耕作地としか書いていない部分、庭畑と書いてある部分もあり、耕作地がどのような形で利用されていたかについて、細かな内訳は明らかでない。

また、1973年6月26日に農業省技師によって提出された技術報告書（Informe Técnico）によれば（前出の地図はこの報告書に添付されたもの）、直接耕作地も間接耕作地ともに灌漑をともなっており、放牧地がアシエンダ分16.41haと、フェウダタリオ用4.91haに区分されている。この両者とも作物に関する記述はない。

そこで、アシエンダから農業省に提出された前述の申告をしてみると、灌漑耕地55ha、非灌漑耕地10haであり、作物ごとの耕作面積は、トウモロコシ43ha、ジャガイモ3ha、オオムギ10ha、野菜など（面積の記述なし）となっている。この申告における3作物の耕作地面積合計56haと、灌漑耕地55haとの数字の違いについてはわからない。ジャガイモ耕地の一部には灌漑が施されていないのだろうか。申告書だけではわからない。とにかく、ビルカノタ川沿いの土地に領域を限定したアシエンダ・ウルコの主作物が、ビルカノタ河谷の低地部の例に違わず、トウモロコシであるのは間違いない。そして、ウルコが灌漑水路より低い土地に限定されていることから、このアシエンダの土地が灌漑耕地であることも疑いないところである。

申告書の中では、アシエンダが所有する搾乳および肉用の牛の数が40頭とされているが、技術報告書の中ではホルスタイン種の乳牛43頭とされており、この乳牛が1975年1月29日の接収命令に踏襲されている。アシエンダ・ウルコの中心部分は、川底低地にある小山の上にあり、斜面には段々畑がしつらえてある。小さな規模とはいえ、現在でも使用されている段々畑は、ビルカノタ河谷低地部では非常に珍しく、このアシエンダが有効に利用されてきたことを伺わせる。乳牛の畜舎もこの小山の頂上の平坦部にあり、ここで近年まで搾乳が行われ、生乳およびチーズとして近隣に販売されていた。

技術報告書の中でフェウダタリオとしてリストアップされているのは8人で、フェウダタリオであった期間は最長8年、最短3年で、すべて最近雇われた人々であることがわか

る。彼等が利用することができる土地は、前述の通り牧草地の合計が4.91ha、耕作地が0.82haである。耕作地でいうとフェウダタリオが利用する土地は一人10aほどにすぎない。家畜はブタが合計12頭、ウシが7頭である。

これらのフェウダタリオが実際に行った仕事については、未だ調査が行き届いていないが、上記のリストにはない2人の労働者の労働日数に関する管理者アルフレド・ベルの1972年7月6日付けの申告書があるのでそれを見てみると、一人の仕事内容は記されていないが、1年の労働日数は、1962年が22日、63年226日、64年173日、65年199日、66年261日、67年222日、68年210日、69年225日、70年226日、71年250日、72年20日となっている。1969年からは毎年休暇が与えられ69年25日、70年16日、71年19日、72年35日となっている。

また、もう一人はトラクターの運転士で、労働日は63年29日、64年162日、65年268日、66年272日、67年236日、68年43日、69年252日、70年226日、71年280日、72年67日となっている。また休暇は、69年32日、70年42日、71年38日、72年14日である。この二人に対しては日給が支払われている。この給料の支払いと、労働日数を見ると、少なくともこの二人が古典的なフェウダタリオではないことは明らかである。労働日数を見ると、一年中土曜日曜を除いて毎日働いた日数に近い労働日数が計上されている。フェウダタリオと分類されていても、上記の二人の労働者は常勤の賃金労働者であって、フェウダタリオの名前から連想される、身分的支配を受けた農奴とは全く異なる労働者である。

トウモロコシ栽培にかかる労働量は、季節的によって大きく変動する。耕起、灌漑、播種、畝寄せ、雑草とり、収穫、脱穀など、には多くの労働力が集中的に必要とされるが、その他の時期には基本的に労働力は必要としない。ウルコに8人のフェウダタリオが存在したということは、このアシエンダが、トウモロコシ栽培と並んで、乳牛の飼育と搾乳に重点を置いていたために常勤労働者を必要としたことを物語っている。

逆に、トウモロコシ栽培に関わる農繁期には、常勤の労働者だけでは労働力が不足する。最後のマヨルドモによれば、この時期にはビルカノタ北斜面上部の先住民共同体から季節労働者を導入し、常勤のコロノたちは季節労働者の監督にあたったという。この労働者たちはかつてウルコの一部であったワマンチョケからなどではなく、ピサク地区のアマル (Amaru) 共同体などから移入されたと最後のマヨルドモが証言している。多くのアシエンダの例にもれず、アシエンダ・ウルコにおいても、労働力には二つの種類が存在したのである。

4. 結論

筆者の研究テーマは、先住民共同体と国家社会の接合と分節である。接合も分節も実

は articulation の訳語でしかない。この articulation という語は、異なった単位が互いに接合すると意味と、ひとつの単位が関節をもって折れ曲がるように分節するという二つの意味を担っている。これを一語で言い表すのが難しく、あえて「接合」と「分節」という二語で表現している。

カルカ郡において、地域社会はアシエンダや先住民共同体などさまざまな社会単位に分節している。そしてまた、農地改革後に旧アシエンダから作られた新たな先住民共同体と旧来の共同体の間の紛争から明らかなように、先住民共同地内部でも分節は起ってきたのである。

アシエンダ・ウルコの例からは、政治経済的状况の変化にともなって、アシエンダがその性格を変化させて、フェウダタリオの居住区域を行域から切り離し、自らは商品作物栽培適地にある直轄領の経営に特化するようになった例を引き出すことができる。アシエンダは一枚岩ではなく、その内部での分節もさまざまな形で行われてきたのである。

一方、本稿では詳しく紹介することができなかったが、アシエンダと先住民共同体は、互いに複雑に関係しあいながら、この地域の体制を作り出してきた。アシエンダと先住民共同体は、互いに関係ないどころか、ある種の相互依存関係にあり、カルカ郡、クスコ県、ひいてはペルー共和国全体の大きなシステムの一部として機能してきたのである。

例えば、先住民共同体は基本的に食料自給をめざす社会経済単位であるが、同時に外部への季節労働力の供給源でもあった。このような先住民の社会単位がアシエンダの内部に取り込まれれば、コロノの集落となり、彼らは自留地で食料自給を達成すると同時に、アシエンダの労働力としても機能したのである。そして、もしそれが先住民共同体としてアシエンダの外部に自立していたとしても、その共同体は食料自給地としての意味をもっているにすぎず、彼らもコロノと同じように、アシエンダの季節労働力としても働いていたのである。

カルカ郡の農村社会経済体制は、ひとつの地域全体を包含するシステムとしてとられるべきであり、アシエンダ、先住民共同体などの単位は、ひとつひとつの単位がもつ接合と分節の度合いは違うものの、全体システムの中に置いてみなければ、その機能をはかることはできない種類のものである。アシエンダも先住民共同体も、カルカ郡の地域社会の政治経済的文脈の中で、接合と分節を不断に繰り返しており、その動態的变化の全体像を提示すべく準備を進めている。

注

- 1) フェウダタリオとコロノとは、別種の労働者であるとされることもあるが、カルカ郡においては、おおむねその区別は行われていない。本報告書で参照したさまざまな文書では、両方の名称が区別されずに用いられているため、文書で用いられた名称をそのまま用いることにするが、同じ意

味で用いていることを断っておく。

- 2) ビルカノタ河谷におけるこれらの小規模自作農、小作農、農業労働者の、農地改革前の姿についてはほとんどわからない。ラ・コンベンション郡の非常に大きなアシエンダに受益小作農がビルカノタ地域から導入されていたことから考えると、その人口はわからないものの、この地域に自作農、小作農、農業労働者がいた可能性は高い。
- 3) 先住民共同体は、長く *comunidad indígena* と呼ばれたが、先住民社会の国家への統合を強調するペラスコ軍事政権期において、*comunidad campesina* と呼びかえられた。この呼び方は現在でも踏襲されている。
- 4) カルカ、ラマイ、コヤ、ピサクから山地上部に至る途中の中間地帯については、ほとんど調査を行っていない。しかし、ビルカノタ河谷底部から山地の最上部を越えて反対側にまで達するような巨大なアシエンダが存在しなかったことは確実である。また、ピサクの東のサン・サルバドルまでの間は、河谷底部を一部調査しただけで、北側斜面部分については全く調査していないので、この区域のアシエンダについては何も言うことができない。
- 5) クスコ県においては、ほとんどのアシエンダが農地改革の適用を受けた。ただ、その適用のあり方はさまざまで、全面接収を受けたもの、大部分が接収されたが旧所有者にその一部の権利が残されたもの、ほとんど無傷で農地改革を乗り切ったものに分けられる。しかしながら、農地改革の影響は甚だしく、少なくともかつてのアシエンダの姿をそのまま保存しているものは全くない。
- 6) アシエンダ・ウルコの最後の統括者の証言によれば、伝道会側の代表者であったイギリス人アルフレッド・ベル (Alfred Bell) は、フリオ・サン・ロマンとの紛争や訴訟に疲れ果てた経験から、農地改革に際しても、争いを嫌悪し、強く争わなかったのだという。
- 7) この事例は、ビルカノタ河谷底部地帯における農地をめぐる現在も続くさまざまな係争を示すひとつの例である。ウルコなど農村共同組合に改組された旧アシエンダの土地が、個人所有地と分配される際にも紛争は生じだし、フジモリ政権によって始められた土地権利の再確認ないし新たな権利の付与計画が、新たな紛争を続発させている。しかし、これらの問題に対する詳細な検討は本稿の範囲を超える。この問題に対する分析は将来の課題としたい。
- 8) プロテスタント伝統団体 *The Inca Schools Society* をクスコ地方の歴史の中でどう位置づける作業はまだできない。アンデス地域におけるプロテスタント伝道についての知識が筆者に不足しているためもあるが、この伝道会についての直接の資料を入手することができないのも大きな理由の一つである。たとえば、この伝道会は農地改革の時点で、同じクスコ県のカンチス郡 (Canchis) 郡の2か所に伝道所と学校を所有していたが、その活動についてはまだよくわからない。

文献

Anrup, Roland

- 1990 *El taita y el toro: en torno a la configuración patriarcal del regimen hacendario cuzqueño*. Göteborg y Estocolmo: Departamento de Historia, Universidad de Göteborg, e Instituto de Estudios Latinoamericanos, Universidad de Estocolmo.

Burga, Mauel

- 1976 *De la encomienda a la hacienda capitalista: el valle de Jequetepeque del siglo XVI al XX*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

Fioravanti-Molinie, Antoinette

- 1982 Multi-Levelled Andean Society and Market Exchange: The Case of Yucaj (Peru). In David Lehmann (ed.)

Ecology and Exchange in the Andes, pp. 211-230. Cambridge: Cambridge University Press.

Gade, D.W.

1975 *Plants, Man, and the Lands in the Vilcanota Valley of Peru*. The Hague: W. Junk.

Glave, Luis Miguel and María Isabel Remy

1983 *Estructura agraria y vida rural en una región andina: Ollantaytambo entre los siglos XVI y XIX*. Cuzco: Centro de Estudios Andinos "Bartolomé de las Casas".

木村秀雄

1993 「ボリビア共和国ラパス県ラレカハ郡における農地改革——改革原簿の解析に基づく農村土地所有形態の分析」『外国語科研究紀要』40(4):17-80。

Orlove, B.S.

1977 *Alpacas, Sheep, and Men: The Wool Export Economy and Regional Society in Southern Peru*. New York: Academic Press.

Orlove, B.S., and G. Custred

1980 *Land and Power in Latin America: Agrarian Economies and Social Process in the Andes*. New York: Holmes and Meier Publishing.

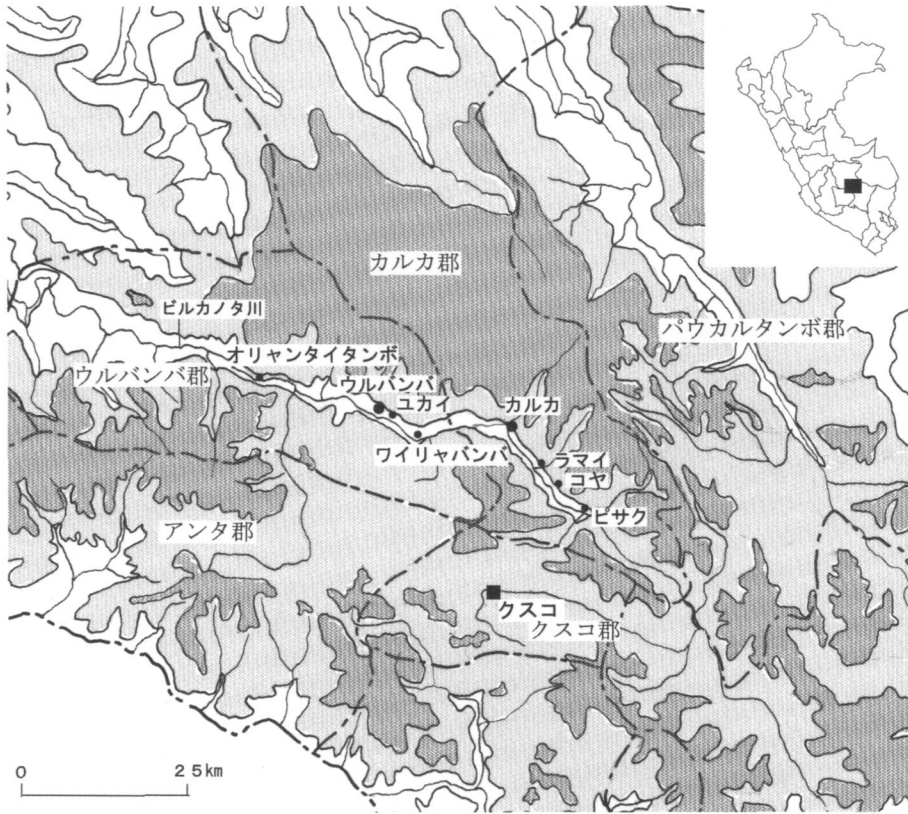


図1 クスコ県カルカ郡および本論でとりあげる主な都市

